

雪の上のおじいさん

小川未明

青空文庫

ある村に、人のよいおじいさんがありました。ある日のこと、おじいさんは、用事があつて、町へ出かけました。もう、長い間、おじいさんは、町に出たことがありませんでした。しかし、どうしてもいかなければならない用事がありましたので、つえをついて、自分の家を出ました。

おじいさんは、幾つかの林のあいだを通り、また広々とした野原を過ぎました。小鳥が木のこずえに止まって鳴いていました。おじいさんは、おりおりつえをとめて休みました。もう、あたりの圃はさびしく枯れていました。そして、遠い、高い山々には、雪がきていました。おじいさんは早く町へいつて、用事をすまして帰ろうと思ひました。

村から、町までは、五里あまりも隔たっていました。その間は、さびしい道で、おじいさんは、あまり知っている人たちにも出あいませんでした。

やつと、おじいさんは、昼すこし過ぎたころ、その町に入りました。しばらくきてみながった間に、町のようすもだいぶ変わっていました。おじいさんは、右を見、左をながめたりして、驚いていました。それもそのはず、おじいさんは、めったに村から出たことがなく、一日、村の中で働いていたからであります。

「私が、くわを持って、毎日、同じ圃を耕している間に、町はこんなに変わったのか、そして、この私までが、こんなに年をとってしまった。」と、おじいさんは、独りため息をもらしていたのです。

「私は、遊びに町へ出たのでない。早く用事をすまして、暗くならないうちに、村まで帰らなければならぬ。」と、おじいさんは思いました。

そこで自分のたずねる場所をさがしていますと、公園の入り口に出ました。

公園には、青々とした木がしげっていました。人々が忙しそうに、その前を通り抜けて、あちらの方へいってしまふものもあれば、また公園の中へ入ってくるもの、また、そこから出てゆくものなどが見えました。しかし、その人々は、みんな自分のことばかり考えて、だれも、その入り口のそばの木の下に立って、しくしくと泣いている子供のあることに気づきませんでした。またそれに気がついて、知らぬ顔をしてゆくものばかりでありました。

このおじいさんは、しんせつな、人情深いおじいさんで、村にいたるときも、近所の子供らから慕われているほどでありましたから、すぐに、その子供の泣いているのが目につきました。

「なんで、あの子は泣いているのだろう。」と、おじいさんは思いました。けれど、おじいさんは、用事を急いでいました。そして、早く用をたして、遠い自分の村に帰らなければなりませんのでした。いまは、それどころでないと思つたのでしよう。その子供のごことが気にかかりながら、そこを通り過ぎてしまいました。

しかし、いいおじいさんでありましたから、すぐに、その子供のことを忘れてしまうことができませんでした。いつまでも、子供の姿が目に残っていました。

「あの子は、なんで泣いていたのだろう。母親にでもまぐれたのか、それとも、友だちを見失つたのか。よくそばへいつて、聞いてみればよかつた。」と、おじいさんは、日ごろ、やさしい心にも似ず、情なく、そこを通り過ぎてしまったのを後悔いたしました。「それは、そうと、私のたずねていくところがわからない。」と、おじいさんは、あちらこちらと、まごまごしていました。そして、おじいさんは、昔、いったことのある場所を忘れてしまつて、幾人ともなくすれ違つた人々に聞いていました。

「あのあたりで聞いてごらんなさい。」などといいのこして、さっさといつてしまうものばかりでありました。

おじいさんは、うろうろしているうちに、またさびしいところへ出てしまいました。そ

こは、先刻その入り口の前を過ぎた、同じ公園の裏手になっていました。青々とした常磐木が、うす曇った空に、風に吹かれて、さやさやと葉ずれがしています。弱い日の光は、物悲しそうに、下の木や、建物や、その他のすべてのものの上を照らしていました。

「また、公園のところへ出てしまったか。」と、おじいさんは、もどかしそうにいいました。

すると、すぐ目先に、鉄のさくに寄りかかって、さつき見た六つばかりの男の子が、しくしく泣いていました。これを見ると、おじいさんはびっくりしてしまいました。

おじいさんは、なにもかも忘れてしまいました。そして、すぐに泣いている子供のそばに近寄りました。

「坊は、どうして泣いているのだ。」と、おじいさんは、子供の頭をなでながら聞きました。

「お家へ帰りたい。」と、子供は、ただいって泣いているばかりでした。

「坊やのお家はどこだか？ 私がつれていってやるだ。」と、おじいさんは田舎言葉でいきました。

しかし、子供は、自分の家のある町の名をよく覚えていませんでした。それとも、悲しさが胸いっぱい、問われてもすぐには、頭の中に思い浮かばなかったものか、

「お家へ帰りたい。」と、ただ、こういつて泣いているばかりでありました。

おじいさんは、ほんとうに困ってしまいました。それにしても、さつきから、この子供はこの公園のあたりで泣いているのに、だれも、いままで、しんせつにたずねて、家へつれていつてやろうというものもない。なんとという町の人たちは、薄情なものばかりだろう。それほど、なにか忙しい仕事があるのかと、おじいさんは不思議に感じたのでした。

「お家へ帰りたい。」

子供は、こういつて泣きつづけていました。

「ああ、もう泣かんでいい。私が、坊やをつれていつてやる。」と、おじいさんは、子供の手を引いて、その鉄さくから離れました。

「坊や、困ったな。お家のある町がわからなくては。」と、おじいさんは子供をいたわりながら、小さな手を引いて歩いてきました。すると、あちらに、風船球売りがいて、糸の先に、赤いや、紫のをつけて、いくつも空に飛ばしていました。

「どれ、坊やに、風船球をひとつ買ってやろう。」と、おじいさんはいいました。

子供は、見ると、ほしくて、ほしくてたまらない。紫のや、赤いのが、風に吹かれて浮かんでいましたので、泣くのをやめて、ぼんやりと風船球に見とれていました。

「赤いのがいいか、紫のがいいか。」と、おじいさんは聞いていました。

「赤いのがいいの。」と、子供は答えた。

「風船球屋さん、その赤いのをおくれ。」と行って、おじいさんは、懐から大きな布で縫った財布を出して、赤いのを買ってくれました。

「飛ばさないように、しっかりと持っていくのだ。」と、おじいさんはいいました。

二人は、また、そこから歩きました。

子供は、風船球を買ってもらって、そのうえ、おじいさんがひじょうにしんせつにしてくれますので、もう泣くのはやめてしまいました。そして、とほとほとおじいさんに手を引かれて歩いていました。

「坊や、おまえは、どっちからきたのだ。」と、おじいさんは、こごんで子供の顔をのぞいてきました。

子供は目をくるくるさして、あたりを見まわしました。けれど、子供もこの辺へきたの

は、はじめでだとみえて、ぼんやりとして、ただ驚いたように目をみはっているばかりではありません。

「坊は、歩いてきた道を覚えていられるだろう、どちらから歩いてきたのだ。」と、おじいさんは、やさしくたずねました。

子供は、再三おじいさんに、こうして問われたので、なにか返事をしなければ悪いと思つたのか、

「あつち。」と、あてもなく、小さい指で、にぎやかな通りの方を指したのです。

「坊は、きた道を忘れてしまったのだろう。無理もないことだ。なに、もうすこしいつたら巡査さんがいるだろう。」と、おじいさんはいいました。

「おじいさん、巡査さんは、いやだ。」と、子供はいつて、またしくしくと悲しそうに泣き出しました。

おじいさんは、急にかわいさを増しました。また、巡査と聞いて、泣き出した子供を見てもおかしくなりました。

「よし、よし、巡査さんのところへはつれてゆかない。おじいさんが、お家へつれていってやるから泣くのじやない。ほら、みんなが笑っているぞ。」と、おじいさんはいいま

した。

公園の方で、鳥のいないでいる声が聞こえました。空を見ると、曇っていました。そして、寒い風が吹いていました。

おじいさんは、ほんとうに困ってしまいました。どうしたら、この子供を家へとどけてやることができるだろうかと思いましたが、子供の親たちが、どんなに心配しているだろう。そう思うと、早く、子供をあわしてやりたいと思いましたが。どうして、この子供は、こんなところへ迷ってきたらう。この近所の子供なら、自分の家の方角を知っている。うなものがと、おじいさんは、いろいろに考えました。

しかし、世間には、怖ろしい鬼のような人間がある。自分が苦しいといって、子供を捨てるような人間も住んでいる。そんな人の心はどんなであろうか。

「坊は、おじいさんの家の子供になるか。」と、おじいさんは、笑いながらききました。「なったら、また、風船球を買ってくれる？」と、子供は、おじいさんの顔を見上げました。

「ああ、買ってやるとも、いくつも買ってやるぞ。」と、おじいさんは、大きなしわの寄った掌で子供の頭をなでてやりました。おじいさんは、幾十年となく、毎日、圃に出て

くわを持つていたので、掌は、堅く、あらくれだつていましたが、いま子供の頭をなでたときには、あたたかい血が通つていたのであります。

このとき、あちらからきちがいのように、髪を振り乱して、女が駆けてきました。

「坊や、おまえはどこへゆくのだい。」と、母親は子供をしかったです。

子供は、またお母さんに、どんなにひどいめにあわされるだろうかと思つたのでしよう、急に大きな声で泣き出しました。

「そんなら、このお子供さんは、あなたのお子さんですかい。」と、おじいさんは女の人にききました。

「私の子供でないかも知れないもんだ。朝から、どんなに探したことですか、警察へもどけてありますよ。」と、女はいいました。

「さあ、坊や、お母さんといっしょにゆくだ。」と、おじいさんはいいました。

子供は、ただ泣いていて、おじいさんのそばを離れようとしません。

「おまえは、どこへゆくつもりだい。」と、母親は怖ろしい目をしてどなりました。

「おじいさんといっしょにゆくのだ。」と、子供は泣きながらいいました。

「おじいさん、この子をどこへつれてゆくつもりですか。」と、母親は、おじいさんに

向かつて腹だたしげに問いました。

おじいさんは、なんとという気のたつた女だろう。子供がこれではつかないはずだ。きつと家がおもしろくなくて、それで、あてもなく出て歩いているうちに道を迷ってしまったに違いない。それにしても、あんまり優しみのないところをみると、継母であるのかもしれないぞと、おじいさんは、いろいろに考えましたが、こんな女には、わかるようにいわなければだめだと思つて、ここまで自分が子供をつれてきたことをすっかり話して聞かせたのです。

すると、どんな気のたつた女でも、おじいさんのしてくれたしんせつに対して、お礼をいわずにはいられませんでした。

「それは、ほんとうにお世話さまでした。さあおまえは、こちらへおいで。」と、母親は、おじいさんに礼をいいながら、子供の手を引つ張りしました。

「さあ、お母さんとゆくのだ。」

おじいさんは、目に涙をためて、子供を見送りながらいいました。

子供は、振り返りながら、母親に連れられてゆきました。そして、その姿は、だんだんあちらに、人影に隠れて見えなくなりました。おじいさんは、ぼんやりと、しばらく

見送つていましたが、もういつてしまった子供をどうすることもできませんでした。また、いつかふたたびあわれるということもわからなかつたのです。

おじいさんは、自分の用事のことを思い出しました。そして、また自分のゆくところをたずねて、町の中をうろついていました。ちようど、年寄りのまい子のように、おじいさんはうろろしていたのであります。

「ああ、今日は、もう遅い。それに降りになりそうだ。早く、村へ帰らなければならん。」と、おじいさんは思いました。

おじいさんは、また、自分の村をさして帰途についたのであります。途中で、日は暮れかかりました。そして、とうとう雪が降つてきました。

それだけでなくてさえ、目のよくないおじいさんは、どんなに困つたでしょう。いつのまにか、どこが原だやら、小川だやら、道だやら、ただ一面真っ白に見えてわからなくなりました。

おじいさんは、つえをたよりに、とぼとぼと歩いてゆきました。そのうちに、風が強く吹いて、日がまったく暮れてしまったのです。

まだ、村までは、二里あまりもありました。朝くるときには、小鳥のさえずっていた林

も、雪がかかかって、音もなく、うす暗がりの中にしんとしていました。

かわいそうに、おじいさんは、もう疲れて一步も前に歩くことができなくなりました。だれかこんなときに、通りかかかって、自分を村までつれていってくれるような人はないものかと祈っていました。

雪は、ますます降ってきました。おじいさんは、雪の上にすわって、目をつぶりました。そして、一心に祈っていました。

すると、たちまちあちらにあたつて、がやがやと、なにか話し合うようなぎやかな声がありました。おじいさんは、なんだろうと思つて、目を開けてその方を見ますと、それは、みごとにも、ほおずきのような小さな提燈を幾つとなく、たくさんにつけて、それをばみんなが手に手にふりかざしながら、真っ暗な夜の中を行列をつくつて歩いてくるのです。

「なんだろう……。」と、おじいさんは、目をみはりました。その提燈は、赤に、青に、紫に、それはそれはみごとなものでありました。

おじいさんは、この年になるまで、まだこんなみごとな行列を見たことがなかったのです。これはけつして人間の行行列じゃない。魔物か、きつねの行列であろう。

なんにしても、自分はおもしろいものを見るものだど、おじいさんは喜んで、見ていました。

すると、その行列は、だんだんおじいさんの方へ近づいてきました。それは、魔物の行列でも、また、きつねの行列でもなんでもありません。かわいらしい、かわいらしいおおぜいの子供の行列なのでありました。

その行列はすぐ、おじいさんの前を通りかかりました。子供らは、ぴかぴかと光る、一つの御輿をかついで、あとのみんなは、その御輿の前後左右を取り巻いて、手に、手に、提燈を振りかざしているのです。おじいさんは、だれが、その御輿の中に入っているのだろうかと思いました。

このとき、この行列は、おじいさんの前で、ふいに止まりました。おじいさんは不思議なことだと思つて、黙つて見ていますと、今日、町で道に迷つて、公園の前で泣いていた子供が、列の中から走り出しました。

「おお、おまえかい。」といつて、おじいさんは喜んで声をあげました。

「おじいさん、僕が迎えにきたんです。」と、その子供はいいますと、不思議なことには、いままで五つか、六つばかりの小さな子供が、たちまちのうちに十二、三の大きな子供に

なつてしまいました。

「さあ、みんな、おじいさんを御輿みこしの中なかに入れてあげるのだ。」と、子供こどもは、大きな声こえで命令めいれいを下くだしますと、みんなは、手てに、手てに、持もっている提燈ちようちんを振りかざして、

「おじいさん、万歳ばんざい！」

「万歳ばんざい！」

「おじいさん、万歳ばんざい！ 万歳ばんざい！」

みんなが、口々くちぐちに叫さけびました。そして、おじいさんを御輿みこしの中なかにかつぎこみました。

「さあ、これから音楽おんがくをやつてゆくのだ。」と、例れいの子供こどもは、また、みんなに命令めいれいを
しました。

たちまち、いい笛ふえの音色ねいろや、小さならつぱの音ねや、それに混まじつて、歩調ほちようを合あわし、
音頭おんどをとる太鼓たいこの音おとが起おこつて、しんとしたあたりが急きゆうにぎやかになりました。

おじいさんは、うれしくて、うれしくて、たまりませんでした。そつと輿こしの中なかからのぞ
いてみますと、あの子供こどもが、みんなを指揮しきしています。そして、みんなが口々くちぐちに、なに
かの歌うたをかわいらしい声こえでうたいながら行儀ぎようぎよく、赤あか・青あお・紫むらさきの提燈ちようちんを振りかざし
て歩あるいてゆきました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「童話」

1922（大正11）年1月

※表題は底本では、「雪《ゆき》の上《うえ》のおじいさん」となっています。

※初出時の表題は「雪の上のお爺さん」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2014年4月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪の上のおじいさん

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>